

---

# MOON-4 夜叉2 <11>

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉2 <111>

### 【Zコード】

N7516M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

『おうちへ帰りなさい』-----朝子の言葉に裕希は成城にある自宅へと戻った。

MOONシリーズ4作目『夜叉 2』第2話です。

2・市子・2（前書き）

御気軽にお読み下せこませvvv

## 2・市子・2

裕希は成城にある自宅にいた。  
3階にある自室で制服姿に着替えた時、

「コン コン

スーツ姿の執事がドアをノックした。

「裕希様。お父様が御戻りになられました。」

「うん。徹夜だつたんだね。」

「左様でございます。」

20年この篠原家に勤めている執事は、裕希を自分の子供の様に思っていた。

自然、和やかな会話が始まる。

「寝なかつたの？ 笹。」

裕希がそう問い合わせると、

「坊っちゃんと同じですよ。」

ドアの方に近づいて来た裕希を優しい瞳で見つめそう答える。

「すぐ行くよ、父さんにはそう伝えておいて。」

「かしこまりました。」

深くお辞儀をし笹と呼ばれた執事は少年の部屋を後にした。

(一昨日も朝帰りだつたな、父さん。)

そう思い、もう一度部屋へ入ると白いベッドの横を通りカーテンと窓を開けた。

光の洪水が室内を満たす。

「・・・・・」

裕希の制服は長袖から半袖に変わっていた。  
もう8月。

暫くしたら、夏休みに入る。

そんな事を考えながら、裕希は部屋を後にし螺旋階段を1階に向かって降りて行つた。

1階の中央に広いリビングがある。

そこで裕希の父は待っていた。

「おはよう、裕希。」

まだ30代の裕希の父 雅人はリビングを訪れた彼にそう声をかけた。

「お帰りなさい。また、遅くまで仕事?」

「ちよつと・・・・・ね。」

雅人は微笑し、「今日も一人で学校へ行くのかい?」

椅子へ座る事を勧めながら、雅人が尋ねる。

「うん。」

裕希は座つた。そこへコーヒーがメイドによつて運ばれて来る。

「そう。」

雅人も奥の席に腰を降ろした。「随分と裕希も変わったね。」

「そうかな。」

「コーヒーを一口飲む・・・ブラックのマンデリンだつた。」

裕希は暫く、カップ・ソーターを見つめたまま、

「・・・・・同じだよ、前と。」

その言葉に雅人は軽く頷いただけだった。

裕希は傍らのテレビに視線を移した。

『今日未明、新宿で起きた通り魔殺人事件は』

女性アナウンサーがそう語る。

「・・・・・」

「どうした、裕希。元気がないね。」

雅人が無言の裕希に声をかける。

「ん。何でもない・・・父さん、今日も遅くなるの?」

「たぶんね。」

「じゃ、ちゃんとハイヤー使って行つてね。新宿には近づかない

で。」

「よく口にするね」

雅人もコーヒーを飲み、「新宿。」

「うん。」

裕希は席を立つた。

リビングにも夏の訪れを告げる太陽の日射しが舞いこんで来る。

「あんまり気にしなくていいよ、父さん、俺の事。」

黒い鞄を左手に、「ちゃんと学校行くから・・・・・・もう、

何処にも行かないから。」

微笑む・・・寂しげに。

裕希が成城の自宅で過ごす様になつてから、そして『あの日』から3ヶ月が経つていた。

一人、家に戻った裕希に父 雅人は深くは事情を聞かなかつた。

『篠原さんのお宅ですか?今、ご子息の裕希くんを新宿警察署で保護しています。』

その連絡が雅人についたのは、3か月前の事。

深夜の雨の中、裕希は一人歩いていたという。そこを警察官に保護されていた。

『篠原家の御曹司がこんな所で何してるの。随分前から君のお父さんが捜して欲しいって依頼に来ていたんだよ。』

彼を保護した警察官 早坂 充はそう彼に尋ねた。身上は持っていた携帯と生徒手帳で判つた。

そんな早坂の問にも答えず、裕希はただ父の迎えを待つていた。それは・・・裕希の中である決意が生まれていたから。

「俺は負けたりしない、守つてみせる、取り返してみせる・・・俺の大切な人たちを。」

今はただそれだけだった。

『今』全ての鍵を握っているのは裕希の方。

ただ、正攻法じゃ勝てない - - - 相手は『闇』の力を持つ。

バタン・・・・・

父の目の前でその大きな扉は閉じられた。

放課後、裕希は学校の校庭に一人いた。部活や帰宅で賑わうその校庭の片隅で。

季節は春から夏へと移っていた。

そう - - - あれからもう3ヶ月。

校庭の樹木の緑も雨季を終え、一層陽の光に煌めいている。

「裕希！」

惇が後から彼に声をかける。「今日も部活出ないのか。」

「うん。」「

「・・・・・そう。」

幼馴染の惇は裕希の身に何かあつた事に気付いていた。それが何かは判らない。

そして、聞こづともしない - - -

何故なら、惇は裕希の事をよく知っていたから。

「気が向いた時でいいよ。」

惇は微笑んで、「じゃ、俺部活行くから。」

「うん。」

裕希は頷き、タンク・トップ姿の彼の背を見送った。

『裕希くん。おうちへ帰りなさい。』

あの日 - - - 朝子は倒れた和人を抱きしめて告げた。『もう私たちにはあなたを守れない。あなたに何かあつたら、哀しむのは和人の方だから。だから - - - 』

守れなかつた - - - その気持ちだけが裕希の心の中に残つていて。

『たかが人間』ことに。』

桜の笑い声。

「・・・・・そんなに」

裕希は学校の門の前で立ち止まり、「そんなに俺の事頼れないの？朝子さん。」

周囲を何人もの生徒が談笑しながら、裕希に気付いた風もなく通り過ぎていく。

その人の波が収まつた時。

「俺だつて、男だよ。」

彼は咳き、悔しげに下唇を噛み締めた。

こんな事があつた。

幼稚園に入つて間もない時、病弱な母が冬の朝、その命の終わりを迎えた。

『母さん、眠つてるの？父さん。』

『死』という感覚がまだ無かつた頃。

『そうだよ。もう苦しまなくていいんだよ。』

父は幼い裕希を抱き上げ、そう言った。

『うん。』

父 雅人の腕の中で、『今度田が覚めたら母さん、元気になつてまた一緒に遊んでくれるの？』

ザザザ・・・・・・

校庭の樹木の葉が風に激しく揺れた。

母の死を『死』として感じ取つたのは、その翌日。

雪はまだ降り続けていた。しかし、裕希は母と『本当』に『離れる』まで涙が出なかつた。『離れた』と感じてもまだ涙が出ない。

ドウシテダロウ・・・・・

和人を失い、朝子や秀とも離れた今も、裕希は涙を流す事は無かつた。

どうしてか判らない - - それはまるで裕希自身の『全て』を奪い去られたかの様で。

「何をしておる?」

遙か前方からよく澄んだ自分の名を呼ぶ女性の声が聞こえて来た。下校途中の生徒のざわめきにもかき消される事なく - - その声ははっきりと彼の耳に届いていた。

裕希は顔を上げた。

目の前には、腰まである黒髪を簪でまとめた女性が着物姿で立っていた。

彼女は裕希に向かつて微笑み、

「泣きたければ、泣けばいい。愈えぬ悲しみなどこの世にはないぞ。」

「市子叔母さん。」

裕希は目を見開いて、女性 市子を見上げた。  
何処となく、儚い雰囲気が彼の母と似ていた。

「おいで、裕希。」

長身の女性 市子は両手を広げた。

『おいで、裕希。』

イメージが・・・・・和人と重なる。

「・・・・・市子叔母さん!」

裕希は走つてその胸元に飛び込むと、思いきり泣いた。

「市子叔母さん、俺・・・・・俺・・・・・・・・

言葉にならない、悔しさだけが涙となつて込みあげえる。

「大丈夫、裕希。お前はもう子供ではないのだぞ。」

市子はそんな裕希に言った。「守りたいものがあるのなら、大切なことがあるのなら、闘えばいい、取り返せばいい。そのためだつ

たらいくらでも泣くがいい。」

声は、夕闇の校庭全体に響いていた。

“君の中で時を刻む Rhism  
いつか消える日まで響き合つよう  
愛しさずっと零れおちないで  
輝いて欲しい・・・・・  
闇の中で彷徨う陽炎  
分かち合つもの何もないけど  
気持ちが溢れて きっとそれでいいよね  
たとえ間違いでも  
眩しい光にも負けぬよう  
力強くその羽根を打て Get On The Rhism”

「あの子はきっと帰つて来るわ、秀。」

桜は眠る秀の側にずっと寄り添い、

「もしかしてあの人もそれを望んでいるのかもしれない・・・九

桜。」

そう微笑を浮かべ呟くベッドに横たわる彼の体に自分の身を任せた。

新宿の何処ともいえない、洋館の2階にある寝室で。

## 2・市子・2（後書き）

・・・・・つて『夜叉』3『の原稿締切あと2日。』3はまだ大まかなプロットしか立つてないし（—￥。。。）感想お待ちしております（—）／ペコリ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7516m/>

---

MOON-4 夜叉2 <11>

2010年10月9日04時16分発行